

中国南西部、四川省成都からチベット自治区ラサまで国道が走っている。高山と峡谷の連続で、自然景観の天然博物館といわれる川蔵公道である。ここをラサから東に 875 km のラウオまで行き、更に悪路を南に 40 km 進むと氷河が現われ、カンリガルポ山群の入口である。

この付近一帯は、外国人に開放されて未だ日が浅い。国道でも工事となると全面交通止めとなる。勿論、迂回路などはない。工事をしているのが軍となれば、ただ黙って待つより術がないのが中国である。路上に座り込み博打を始める人々、茶を沸かし始める家族、われわれは 6000m 級の山々、人間模様を眺め、カメラに収めて時間を潰した。

手元にあるソ連製の「東チベット概念図」には、山名は殆ど記されていない。ここを精力的に探検し、「チベットのアルプス」として発信し続けているのが日本山岳会員 中村 保氏で、今、世界中から注目されている。

今回、日本山岳会アルパインスキークラブの有志 10 名で、2005 年 10 月～11 月の 1 ヶ月で、カンリガルポ山群の未踏査地域をスキーで登り、未踏峰のスフコンダ山(5390m)からスキーで滑降する計画を立てた。結果的には力量不足で登頂はできなかったが、4000m を越える未踏の氷河を登り、滑降し、未知の地域を少しでも明らかにできたことは、それなりの意義があったのではないかと考えている。

#### <大屈曲点とナムチャバルワ峰>

東西に伸びるヒマラヤ山脈は、ブータン、ネパール、インド、パキスタン、中国そしてアフガニスタンの 6 ヶ国にまたがっている。ヒマラヤ山脈北側全ての水を集めて流れているのが、ヤルツアンポ川である。ラサ空港着陸前、空港からラサへの道中に見えるこの川は、川幅が広く、幾条にも自由気ままに流れている大河である。周囲の山々には樹木はなく岩だらけで、日本人には異様な光景に映る。

川に舟を出して釣りをしている人影が見えた。漢民族だろうか。チベット仏教徒のチベット人は殺生を嫌う。生きるため止むに止まれず殺生する場合、ヤクのような大型動物の命も、小魚一匹の命も殺生では同じと考えるので、小動物の命を奪うことは稀であると聞いている。それとも、漢民族の流入に伴いチベット人の宗教観、食生活の変化で魚を捕まえるようになったのだろうか。

ヤルツアンポ川はヒマラヤ山脈の北麓を 1500 km も悠々と流れ、山脈の東端で 180 度流路を変える。河床まで 5380m と、6000m ともいわれる世界 1 の峡谷となって西に進路を変える。ここを大屈曲点、中国語では大峡谷と呼んでいる。今日では航空写真や衛星からの画像で解っているが、近づく路は今でもない。40 年ほど前、地元の人たちが、180 度流路を変えることが信じ難く、ヒマラヤの謎の川とされていた。峡谷の行き先を確かめるため複数の丸太を流したが、木っ端微塵に砕け散って丸太の確認ができなかったことが、謎を呼んだという。

大河は、その後中国とインドの国境、マクマホンラインを越えて、ヒマラヤ山脈を迂回してインドに入り、プラマプトラ川となってバングラデッシュでベンガル湾に注いでいる。

この大屈曲点に杭のように突き刺さっているのが、1992年まで未踏峰の最高峰であったナムチャバルワ峰(7782m)である。今回、セチ・ラ(セチ峠)から快晴の下で望むことができた。1992年10月、第2次日本山岳会と中国合同隊が白無垢の頂を踏むが、その陰に県立鶴岡南高山岳部、東京農業大学山岳部の監督を務めた、鶴岡市羽黒町手向出身の早坂敬二郎氏が大きく関わっている。彼は登山許可取得に奔走し、1990年の偵察隊副隊長として参加、中国隊員とコミュニケーションづくり、そして6900mまでの試登で頂へのルートを切り開いた。残念ながら登頂7ヶ月前、北アルプスで雪崩に遭い帰らぬ人となり、登山隊に加わることはできなかった。

### <遙かなるスフコンダ峰>

カンリガルポ山群は、チベット東端に位置し、その南はインド、ミャンマー国境である。水系としては、ヤルツアンポ川の東側の支流で、その源頭にスフコンダ峰がある。この山域は、ベンガル湾の湿った空気が、ブラマプトラ川に沿って入ってくるため降雪量が多く、雪田に近い氷河をはじめ、多くの氷河が発達していることで知られている。

今回のスフコンダ峰は、隊長が氷河によって削られた岩峰が林立する中で、雪に覆われたなだらかな山を地図で見つけて、3年間、温め続けてきた山である。

ベースキャンプ(4000m)までは、チベット人の通訳、コック、ドライバー4人にわれわれ10名の大所帯になった。道路工事で足止めを食うなどして、ベースキャンプまで4日も要した。快晴の続くという10月末から入山したが、毎日のように降雪が続き、テントの除雪が日課の毎日で、2.5日間も停滞を余儀なくされた。こうなると、平均年齢65歳のルート登山隊にとって、ガイド、シェルパ、ポーターレスでは厳しいものになった。

2005年10月29日、昨夜、計画の建て直しを話し合い、食料、燃料からすると最終下山日が11月4日を確認した。その上で、明日の行動は、スムーズにアタカン・ラ(峠)まで前進キャンプを上げるため、先行隊は個人装備だけでアタカン・ラまでの偵察と前進キャンプ地選定し、キャンプ3まで降りる。後発隊は、共同装備と食料を運び上げ、キャンプ3を設営することにした。今回は積雪により殆どヤクを使わず、加えて悪天候で予定通りに行動ができず、当初考えたキャンプ1がキャンプ2(4368m)になってしまった。

10月30日、風雪の中、昨日の打合せ通り先発隊と後発隊に分かれての行動日。キャンプを上へ伸ばすことができず、当初のキャンプ2にキャンプ3(4420m)を設営せざるを得なかった。

10月31日、11月1日、共に激しい風で破れた箇所を修理したテントがバタバタと音を立て、時には押されて大きく変形するほどの荒天で停滞。

11月2日、風雪が止まず停滞。午後になりようやく風が弱まり、明るくなってきた。もう、前進キャンプ設営は、時間的に断念せざるを得ない。ということは、登頂と頂からのスキー滑降の夢が消えてしまった。全員で偵察に向う。30分ほど登るとスフコンダ峰が姿を現した。頂上はピンと尖がった岩で、その直下まで雪の斜面が続いていた。

11月3日、アタカンラ氷河最高地点の峠を「奥アタカンラ」と名付けて、ここを最終目標とし、アタック隊4名がキャンプ3(4420m)を出た。傾斜の緩い雪田状のアタカンラ氷河が続いていた。その最高地点の峠から南に進路を変え、雪稜を登るとスフコンダ峰の頂に達する。10時40分、4585mで雪面が複雑に波打ち、クレパスが隠れていることを暗示していた。右手アタカンリ峰

(5760m)が見てきた。巨大な魚の背びれの様に芸術的なヒマラヤ壁に飾られていた。ここから流れ出している氷河がアイスフォールとなって蒼氷剥き出しでアタカンラ氷河に合流している。13時30分、4770m、峠の反対側に聳える6150m峰が次第に姿を現し始めた。氷河の右奥に目標のスフコンダ峰がわれわれを見下ろしている。奥アタカンラまでは、すんなりとスキーで登れそうだが、2時間近くはかかりそうだ。しかし、時間を気にしながら急いで登るところではない。

日没前にキャンプ3に帰るか、日没覚悟で最低目標まで登るか迷ったが、リーダーが日没前を選択し、ここから引き返すことを隊長に連絡を入れた。隊長からは最高到達地点からしっかり写真撮影をして下山するようにとの指示があったこと、隊長の悔しい気持ちが声に現われていたことをリーダーから隊員に伝えられた。目指してきた山は、鋭く天を突く山々の中であって唯一泰然とたおやかな白い山であった。ザイルを解き、往路の踏み跡を外さないように慎重に滑降を始めた。前方にはカンリガルポ山群の最高峰ルオ二峰(6882m)が、三角錐の美しい姿を隠すことなく聳えていた。途中でサポート隊と合流した。午後の太陽で雪が湿って重くなった。東チベットまで来て滑るわずかな時間は貴重だった。夜の帳が迫る頃、テント場に着いた。夜、山からの寒風が破れテントを叩いた。夕食は、即席フカヒレスープと $\alpha$ 米。今夜は、明日のベースキャンプでの人間らしい食事を夢見そうだ。

11月4日、皮肉にも快晴の下ベースキャンプに戻った。通訳のテンジンがにこやかに迎えてくれた。登山行動中に村の長と、2人の公安官が訪ねて来たという。この付近一帯がインド、ミャンマーへの密行ルート、ダライラマのインドへの亡命ルートになっていたところに来た踏査隊となれば当然だろう。しかし、メンバーリストの年齢をみて、大丈夫かと心配、同情に変わったと笑って話してくれた。(2005/12,2013/7 加筆)